



住永 秀叙勲件
右謹テ裁可ヲ仰ク

昭和六年五月二十八日

内閣總理大臣男爵若槻禮次郎



内

閣



賞勳局書第八九號

内閣 秘書第五

昭和六年六月三日勳記簿
昭和六年五月廿八日勳記簿
昭和六年五月二十八日勳記簿

昭和六年五月二十日 内閣書記官長



内閣書記官



島田 樞

内閣總理大臣

賞勳局總裁



住永 秀敘勳ノ件別紙ノ通議定候
條此段允裁ヲ仰ク

賞勳局

(金)

昭和六年五月二十日

賞勳局總裁

書記官

議定官

否

可

正取
副取
白
赤
青
黒
紫
黄
緑
赤
白
黒
青
紫
黄
緑

叙勳議案

住永秀

右者明治四十一年韓國皇后、御通譯トシテ宮内大奥ニ奉仕シ御通譯

賞勳局

及日本語御練習、御相手ヲ申上ケ
皇后ヲシテ日本ヲ御諒解遊ハシメ
ント大ニ努メ明治四十三年日韓併合
條約締結ノ際ハ王宮内ノ實狀ヲ報
告シ以テ機宜ノ處置ヲ執ラシメ事
件進行ノ上ニ此ニ手違ヲ來スコトナ
カラシメタルノミナラス併合後ハ王宮内
ニ於ケル不安ノ空氣ヲ一掃シ王家ヲ
シテ益々皇室ニ御依頼アラセラルルノ
信念ヲ深カラシメ且内地人ニ對シ王

家ヲ首メ貴族上流ヲシテ多大ノ好感
ヲ有スルニ至ラシメ以テ内鮮融和ノ實
ヲ擧ケ又徳惠姫ノ御輔導御教育
ニ盡カシ其ノ他王宮内ニ於ケル内人ノ
弊風更新ニ竭シタル等功績顯著ナ
リト認ム仍テ拓務大臣ノ宣示請ヲ勘
査シ勲等ヲ擬議スル左ノ如シ
叙勲六等授瑞寶章

賞勲局

賞賜局

内閣 拓務 第五号

官秘第一七七號

昭和六年五月十五日

拓務大臣原 脩次郎

内閣總理大臣男爵若槻禮次郎殿

現住所 朝鮮京城府臥龍洞一番地

敘勲六等授瑞寶章

住永 秀

右者明治二十八年夫任永秀三隨ヒ渡
韓以來日韓親善ノ爲ニ盡瘁シ殊ニ明

拓務省

治四十二年韓國王宮ニ奉仕以來日韓併合
ニ関シテ多大ノ努力ヲ捧ケ且ツ王室ヲ首
メ朝鮮貴族又ハ上流夫人ヲ誘説シテ内
鮮融和ノ實ヲ擧ケ舊韓國白王后ノ御
講習竝ニ李德惠ノ御輔導等ニ関シテ
多年至誠奉仕克ク其ノ任ヲ完フシ其ノ
勤勞功績洵ニ顯著ナル趣ヲ以テ今回朝鮮
總督ヨリ稟申有之候ニ付テハ同人多年ノ功
績ニ鑑ミ此ノ際特ニ頭書ノ通敘勲ノ儀御詮
議相成度功績調書相添ヘ及稟請候也



めくられず

住永秀功績調書

一 経歴概要

秀ハ舊姓ヲ江尻ト言ヒ明治六年東京ニ
生ル幼シテ父母ノ民士の教育ヲ受ケ長シテ
大畧漸ク具ハル明治二十一年對州ノ人住永
瑋三ニ嫁ス瑋三ハ夙ニ韓語ヲ學ビ出デテ
釜山ノ日本管理官廳ニ通譯タリ明治十三年
我花房公使京坂ニ公使館開設ノ際ニハ其ノ下ニ
在リテ斡旋シ爾後帝國領事館判任官東京
外國誌學校教員東京商業學校教員外務省同
翻譯官補、東京商業學校教員、韓國政府補佐員
(奉任待遇)陸軍通譯等ニ歴任ス、秀ハ明治三十八
年大ニ過ワテ韓國ニ渡リ家事ニ従フ傍ラ

朝鮮總督府

韓人ノ教師ニ就キテ韓語學ヲ講習シ
受ケ頼ル上達セリ明治三十三年瑋三官ヲ
退キ京坂ニ賃屋業ヲ營ヒシカ因三十五年
不幸ニシテ暗夜強盜ニ襲ハレ其ノ兇刃ニ
墮レタリ秀ハ異境ニ在リテ夫ノ死禍ニ遭
ヒ野蕪幾許モナクニ兒ヲ抱イテ途方ニ
暮レ悲痛慘憺ノ境ニ陥リシガ瑋三ト同郷ノ
公使館通譯官國分象太郎(後公使館書記官、
統監秘書官、李王職次官等ニ任ズ)夫妻秀母子ニ
深ク同情ヲ寄セ邸内ニ引取リテ懇篤ナル世話ヲ
ナシ同官ノ斡旋ニテ庚子幼稚園ノ保姆ト為レリ
此ノ間秀ハ國分通譯官及韓國ノ學者ヲ就
キテ益々韓語ノ研究ヲ積ミ上流階級ノ言語

ニ精通スルヤ韓国上流ノ家庭ニ出入シ或ハ日本
語ノ教授ヲ為ス等文際大ニ努力メ又日露戦争
ノ際ハ間接ニ公使館ノ高等事務ヲ助ケルニ
至リ茲ニ秀ハ韓国上流夫人ニ幾多ノ知己
ヲ得女流通譯ノ第一人者トシテ有要ノ材ト
ルニ至レリ

ニ 韓国大奥ヘノ奉仕

韓国皇帝ハ明治四十年御父太皇帝ノ御側ヲ
離レ昌徳宮ニ移御アラセラルルヤ皇后ハ我伊
藤統監ノ勸告ヲ容レ新式ノ學科ヲ講習セ
ラルルコトトナレリ茲ニ於テ統監府書記官兒
玉秀雄夫人澤子御教育ノ任ニ當ルコト
トナリ婦人通譯ノ必要生スルニ至レリ蓋シ

朝鮮總督府

韓国ノ慣習トシテ女性ハ他ノ男性ト對談ス
ルコト絶対ニ禁セラレアリ後ツテ通譯モ女子ナ
ラザルベカラザル所ヨリ茲ニ秀ハ撰ハレテ
明治四十一年韓国皇后ノ御通譯トシテ採用
サレ大奥ニ奉仕スルニ至リタリ爾來秀ハ嘗テ
一日モ缺勤シタルコトナク御講習所ニ出仕シ
皇后即チ現李王大妃ガ高等女學校ノ科程
ヲ卒ヘザセラルルマデ御通譯及日本語御練習
ノ御相手ヲ申上ゲ御卒業後ハ一般内人(舊
女官)ト伍シテ宮内ニ出仕シ大妃ノ御託相手ト
為リテ御徒然ヲ御慰メ申上ゲ魚ネテ日本
ノ風俗習慣等ニ關スル談話ヲ御聞ニ達シ
以テ日本ヲ御諒解遊バズベク大ニ努力メタリ

尚秀ハ御講習所通譯拜命ニ次テ明治四十一年
韓國皇后ヨリ勲五等瑞鳳章ヲ授ケラレタリ
三日韓併合當時ノ活動

明治四十三年八月日韓併合條約締結セラレタリ
此ノ條約ハ我寺内統監ト韓國首相出子完用ト
ノ間ニ極メテ順調ニ調印シラレタルモ而テ
其ノ始メ專制國タル韓國ノ皇帝ガ獨自
ノ御裁量ニテ統治權ヲ擧ゲテ我 天皇陛下
ニ御讓與相成ルノ形式ヲ執ララルコトナリ而
シテ皇帝ノ御決意ヲ促スベキ任ニ當時皇位ノ
伯父ニシテ侍從院卿タリシ尹德榮之ニ當ル
コトトナリタルニ依リ茲ニ韓國宮中ニ對シ
周到ナル手配ト嚴密ナル監視ヲ加フルノ

朝鮮總督府

必要ヲ生スルニ至レリ元ヨリ當時韓國宮中
ニハ日本人タル官吏モアリ又我警察官モ配
置シタリテ外部的ノ行動ニハ遺憾ナカリシ
ト雖主トシテ宮中大奧ノ事ニ屬スル

一 尹侍從卿ノ行動如何
二 皇帝御璽ヲ隠カニ他ニ撤出スル憂ナキ
ヤ否

三 皇帝ト大皇帝トノ間ニ内人(女官)ヲ介
シテ秘密ノ通信行ハルコトナキヤ否

四 宮中ト貴族トノ間ニ夫人又ハ内人ニ依リ
テ通信行ハル依テ秘密ノ漏洩スルコト
ナキヤ否

五 貴族夫人又ハ内人等ニ依リテ宮中ニ流

言蜚語ノ流布セラルルコトナキヤ否

等ノ諸事項ニ就キテハ男性ノ絶對ニ接近スル
コトヲ得ザル大奥内ニ奉仕シ韓語ニ堪能ニ
シテ且ツ宮中ノ事情ニ精通ニ兼ネテ御信
用厚キ者以外ニハ何人モ之ニ當リテ其ノ任
ヲ全ウスル者ナシ茲ニ於テ秀ハ秋ニ我國分
祕書官等ノ内意ヲ受ケテ深ク殿内ニ入り
條約ノ開始ヨリ其ノ調印發表ニ至ルマデノ
間前掲諸事項ニ関シ深甚ノ注意ヲ拂ヒ
克ク其ノ狀況ヲ偵察シテ遲滞ナク之ヲ
報告シ以テ機宜ノ處置ヲ執ラシメ事件
進行ノ上ニ些ノ手違ヲ来スコトナカラシメ
タルノミナラズ係合直後ニ在リテハ由來

朝鮮總督府

革命ノ都度悲風慘雨ノ歴史ヲ有スル朝鮮
王宮内危懼ノ念ニ充チ不安ノ氣漲レル折柄
兒王伯爵夫今協力シテ我 皇室ノ御厚
德ニ謝ラセラレ御然諾ヲ重セサセラルル點
シ力説シ且日本人ノ忠君愛國思想注ニ
義俠心ニ富メル美談佳話ヲ御紹介申
上ケ皇室ニ御信賴アリテ王家ノ御安泰
ヲ圖ラセラルルノ可ナルヲ覺知セラルルコト
ニ努ムルト共ニ日本人ノ思想ハ克ク我王
家ニ對シテモ敬意ヲ捧ラマキ由シ祝キテ
不安ノ空氣シ一掃シ王家シテ益々皇室
ニ御信賴アラセラルルノ御信念ヲ深カラ
シメ且内地人ニ對シ王家ヲ首メ貴族上流

ヲシテ多大ノ好感ヲ有スルニ至ラシメ以テ内鮮
融和ノ望ヲ擧ゲタル功績ハ實ニ顯著ナルモノ
アリ

四

徳惠姫ノ御養育ニ関スル努力

徳惠姫ハ初メ福寧堂阿只氏ト申上ケテ孝
太王ノ嬖福寧堂梁氏ノ所出ナリ御幼少
ノ時ハ徳壽宮ニテ御養育遊バサレシモ大正
八年孝太王薨去後昌徳宮ニ移居遊バサレ
茲ニ秀ハ大妃御殿ニ出仕ノ傍ラ姫ノ御養
育ニ當ルコトナレリ秀ハ朝鮮婦人ノ心裡ヲ能ク
解ス即チ姫ノ御養育ヲ完全ナラシメントセバ
豫メ御生母福寧堂ノ諒解ヲ得サルベカラ
サルヲ以テ秀ハ福寧堂ニ接近シ朝夕態

朝鮮總督府

懃ニ對應ニ深ク堂ノ信用ヲ得ルニ至レリ即チ
時機ヲ見計ヒ徐々ニ時代ノ進歩ヲ説キ姫
将来ノ幸運ヲ開カント欲セバ新式ノ教育
ヲ受ケシメラルルノ必要ヲ感セシメ終ニ内地人
小學校タル日出小學校ニ御通學遊バサルル
コトニ御決定相成リ秀子ハ毎科學校ノ御
通學ニ御供申上ケ漸次別レサセラルルニ及
ヒ他ノ侍女ト交代ニ御歸堂後ハ御復習ノ
御相手又ハ御起居ニ関シ御輔導申上ケ日出
小學校御卒業後ハ東京へ御遊學御慈
愛深キ御兄宮ノ下ニ在リテ御勉學遊ハ
サルノ必要ヲ説キテ首尾克ク其ノ諒解
ヲ得秀御東宮ノ役ヲ承リ且福寧堂ノ

變心ヨリ中途御帰鮮ヲ望マセラレテハ一大事ト
被ニ長官等ト計リテ堂ノ東京見物ヲ断行
ニ秀之ニ随ッテ案内大ニ努メテ姫ノ御平穩
ニ御勉強ノ現状ヲ實見セシメ且ツ到ル
所内地人ノ堂ニ對シ好意ヲ寄ラセラルル状
ヲ紹介ニ堂ヲシテ姫ノ御遊學ニ對シ毫
モ憂フルノ念ナキニ至ラシメ又到ル所内地
人ノ好意ニ對シテハ衷心感激セシメタリ
尚姫昨冬御健康ヲ害セラルルヤ秀倉
皇トシテ東上ニ日夜姫ノ御身邊ニ侍リテ
御看護申上ゲ今ヤ漸ク御全快ヲ見ルニ
至レリ其ノ間嚴冬ノ候熟睡ヲ取ラザル
コト百餘日粉骨碎身ノ誠忠ヲ捧ケタル

朝鮮總督府

ノミナラズ德惠姫ノ御婚約ニ就テハ夙々
其ノ内部ニ在リテ盡力シタル所洵ニ多大
ナリ斯ノ如ク姫ノ今日ノ御成長ハ秀十
餘年間心膺ヲ碎キテ奉仕シタル結果
ト申スモ敢テ過言ニ非ラザルベシ

五

王室内ノ空氣一新ニ盡シ内鮮婦人ノ融和ヲ圖ル
元來朝鮮ノ婦人ハ舊時極端ナル儒教
主義ノ下ニ養ハレ男子ト居シ別ニシテ
内房深ク封鎖セラレ世上交渉絶無ナル
ヨリ多クハ猜疑心深ク殊ニ宮中ニ在リテハ
無教育ナル内地ノ君側ニ侍リテ聰明ヲ
蔽ヒ延ヒテ其ノ害國政ニ及ブノ實状ナ
ルヲ以テ秀ハ是等内地ノ間ニ伍シテ座談

會ヲ催シ其ノ流暢ナル朝鮮語ヲ以テ或ハ
大義名分ヲ説キ或ハ婦人ノ職分ヲ教ヘ
不知不識ノ間ニ内人ノ弊習ヲ更新スル
コトニ努メテ漸次其ノ功ヲ修メ又貴
族上流ノ家庭ニ出入シテ日本内地ノ慣習
ヲ教ヘ日本婦人生活ノ實状ヲ傳ヘ又内地
人上流家庭ニ出入シテ誤リ易キ朝鮮家庭
内ノ真相ヲ知ラシメ以テ彼我ノ接近融和
ヲ圖リタル功績是亦多大ナルモノアリ最後
ニ特記スベキハ秀ハ資性温順ナルモ俊敏ノ
質ヲ具ヘ頭腦克ク働キ又武士の氣節ヲ具
有シ自己ヲ捨テテ誠心誠意奉行スルノ
美點ヲ有ス故ニ本人ハ王宮内ニ在リテハ

朝鮮總督府

慇懃ニシテ嚴肅時ニ打解ケルコトナキニ
沐ラサルモ而テ敬愛ノ態度ヲ失ハズ座作
進退皆禮ニ適フ此ノ故ニ内人等ハ多少窮
窟ヲ感ズルモ反感ヲ懷カズ又時アリテ
諫諷好方ムルコトアルモ事毎ニ理ノ正ニキカ
故ニ敢テ之ニ逆ハズサレバ大妃深ク本人ヲ
愛セラレ概不其ノ進言ヲ容レサレ内人
等亦先生トシテ敬意ヲ拂ヒ衷心其ノ言ニ
聽従スルヲ常トス本人ノ王宮内ニ在ケル勤
勞功績ハ真ニ著大ニシテ且内弊融和ノ
為多年盡瘁シタル功績亦大ニ賞讃スル
ニ足ルト謂フベシ

履歴書

原籍 東京市神田區中猿樂町千三番地
住所 京城府臥龍洞 一番地

住永惇二母

住永秀

明治六年十一月二十五日生

年月日 事

項

明治三年七月十二日

七夫琦三ニ從ヒ渡鮮爾來家庭ニ於テ鮮語

自明治三十七年四月

習得當時通信局長吳世昌夫人等ト交際ス

至明治四十年十月

郭氏ニ鮮語ヲ朴義東氏ニ漢文ヲ學ブ

自明治三十七年十月

男爵韓昌洙氏令嬢北若夫人ニ日本語教授

明治四十一年十月十四日

昌德宮中御講習所通譯拜命

年當月金六拾圓ヲ給フ

朝鮮總督府

舊韓國ヨリ勲五等ヲ授ケラレ

妃殿下ニ伯爵兒玉夫人日本語御教

授後翻譯ヲ承リ他時間内ニ女官

八名ニ日本語ヲ教授ス

梨本宮同妃兩殿下御渡鮮當時御通譯

ヲ承レ

明治四十二年

妃殿下御命ニ依リ尹弘愛夫人甲

正愛夫人侯爵尹澤榮氏令嬢子爵尹

德榮氏令嬢ニ五ヶ年間日本語教授ヲ

ス

閑院宮同妃兩殿下御渡鮮當時御通譯ヲ

承レ

大正八年

德惠姫ニ昌德宮内ニテ小學一年ノ

科程ヲ申上ル

德惠姫御東上ノ御供ヲ申ス

福寧堂東京地御番保ノ御被嫌

同ノ伺候ノ御供ス

昭和三年九月六日

通譯事務ノ囑託ヲ命セラル

主殿課兼樂美齋勤務ヲ命セラル

昭和五年七月六日

大破出張中川御用掛ニ代リ德惠

姫御家庭向キ御補導ヲ承リ今

ニ至ル

朝鮮總督府